
兄妹以上、きょうだい未満

towa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄妹以上、きょうだい未満

【Nコード】

N4556S

【作者名】

towa

【あらすじ】

わたしたちはきょうだいじゃない。

あいつは私の兄じゃないし、私も妹なんていう可愛い生き物なんかじゃない。

けれどわたしたちは繋がっている。

決して逃れられはしない、「血」という、なにより強固なしがらみによって。。。

同じ血を分けた兄妹でありながら、10年以上も引き離されて育った「みどり」と「高馬」。
いがみ合いながらも惹かれあってしまう二人は、どこへ進んでいくのか……。

プロローグ（前書き）

この作品は某巨大掲示板に投稿したものを加筆・修正したものであることをここに断っておきます

プロローグ

秋は、時おり露時雨が舞い降りて、鮮やかな日常を覆っては煙る。リースカーテン越しに見るようなその光景は儚げであり、そしてどこかしら退廃的でもあった。

しっとりとした穏やかな情景に心惹かれるものの、私はなぜか、その景色には組み込まれずにいる。

蚊帳の外に放っておかれたように、露時雨の美しい世界には、入ることが叶わないのだ。

何かが、私が一歩踏み出すのを邪魔している。

やめて。そちら側に、行きたいのだ。

露時雨の檻で遮断された世界に、組み込まれたいのだ。

私はそちら側の人間なのだから。

1、浅い夢から

「はあっ…！…はあ、はあ」

あまりの息苦しさと恐怖で私は飛び起きていた。

それと同時に呼吸を素早く繰り返す。

嫌な夢を見た。

どんなに洗つても染みになって取れない汚れのような、しつこい悪夢だ。

内容は、思い出せそうでも、すんでのところで思い出せない。かなりの不快感だった。

「はあ…はあ…」

気管支が落ち着いてきてもなお、必要以上に酸素を体に取り込む。新しい空気をゆっくりと入れることで、今見ていた夢が薄まってくように、そう願いながら深呼吸を繰り返した。

ふと気付けば、寝室の中はほの暗い。

まだ夜が明けていないのだ。

この嫌な余韻を体に残したまま学校へ向かうのは億劫だったので、気持ちを落ち着ける時間があるのはありがたいことだった。

『…ん…ふ…』

ようやく心身ともに人心地がついた時になって、どこからか不快な雑音が聞こえてきた。

最悪なタイミングだった。

それとも、あまりに取り乱していたせいで雑音に気付かなかっただけか。

どちらにしろ、それは私にとって不都合極まりない事実であることに違いはない。

そうしてその雑音の原因もすぐさま突き止めてしまえることすら、忌々しい事実以外の何物でもなかった。

『あ…や…た、かま』

聞こえてくる雑音はいやに甲高く、この家に住む私の家族、母、父、兄、そのどの声とも違っている。

「下品……最低……いなくなればいいのに」

口汚く罵りの言葉を吐き出しながら、私は両手で耳を塞いだ。

おそらく二つ隣の部屋から漏れてきているのであろう雑音は、紛れもなく最中の女の声であり、その原因は二つ上の兄、秋良高馬であることは疑いようもなかった。

せつかく悪夢から目を覚ましたというのに、その悪夢に逃げ込みたくなるほど陰惨な現実が待ち受けていようとは、思いもしなかった。

私は、このふしだらで不誠実な兄のことが、嫌いで、嫌いで、仕方がない。

2、教室にて

「みどりー、もう帰んの？」

「うん、ちよつと家の手伝い押しつけられちゃって」

「偉いねー、日本の大和撫子ここにありって感じだねー。信じられない」

「あはは、大和撫子ってただの雑用係のこと？」

「…ごめん、言いなおすわ。大変だねえ、毎度毎度」

高校で友達になった菊池百合子の軽口に付き合いながら、私は鞆の中に参考書などを詰め込んでいた。

さつさと家に帰ってやることをやってしまわないと、「あいつ」が帰ってくるからだ。

私の忙しそうな仕草で何かを察したのか、トレードマークの短いお下げをくるくると指でいじりながら、百合子は幾分か声を和らげて言った。

「でもさでもさ、たまにはカラオケとか付き合ってよ。あんた歌うまいし、みんなも気にしてんだよ、けっこう」

「ホント!?なにそれ、お世辞とか気持ち悪いよ百合子」

「へー、そういうこと言っちゃう?んじゃあせっかくいいこと教えてあげようと思ってたのに、やっぱり言うのやめちゃおっかなー」

意味ありげに大きな瞳を細めて、百合子はニヤニヤとやたらいやらしい顔をしてみせる。

そんな風に言われれば是が非でも聞き出したくなるのが人のさかと言うもので、私は瞬時に頭を下げていた。

「百合子様のほめ言葉、ありがたく頂戴します!だからそのいいことって何か教えて〜」

「よしよし、素直でよろしい」

私の大仰なパフォーマンスに溜飲を下げたのか、百合子がヒソヒソ声で耳打ちしてきた。

「いま3組の女子のあいだで言われてんだけどさ、1組の佐野くん、あんたのこと好きらしいよ」

驚きのあまり、え？と聞き返すこともできなかった。

1組の佐野くんと言えば、私たちの学年はおろか、校内中の女子が気にしているのではというほどカッコイイことで有名な人だった。何かの間違いだろうとしか思えない。

「それただの噂でしょ？だれかと間違えてるんじゃないの」
寝不足ということもあり、私は面倒くさそうな噂話にすぐ興味を失った。

とりあえず、私にとってはひとつもいいこととは思えない類の情報だ。

「ったく、みどりはこれだから…。ちょっとは嬉しそうな顔したら？普通ははしゃぐよ？色気づくよ？あんた男に興味ないんじゃないの？」

話して損したとでもいうように、百合子はジト目で腕組みをして睨んできた。

何を言われても興味がないものは興味がないのだからしょうがない。「そうかもね。でも信じられないし、本人ともあんまり面識ないし、それで喜ぶ方がバカじゃない？私みたいなの、わざわざ選ぶと思えないし」

一通り宿題に関係ありそうな教科書を詰め込んで、あとは帰るだけとなった。

隣で、うらめしそうな顔をした百合子が、特徴的などんぐり目をくりくり動かして私の様子をつがっている。

こうして見ると、百合子は小動物のように可愛くて、守ってあげたくなる雰囲気がある。

中身はといえばそうでもなくてむしろ頼りがいがある姉御肌な性格だけど、男女とも友達が多くて付き合いやすいし、私のような地味な人間よりはよっぽどモテそうだった。

そんなふうな評価を下していると、百合子が何かを諦めたように「はー」と大きくため息をついて肩を落とした。

「……わかった。そうよね、あんなスゴイ人が身内にいるんじゃ、理想が高くなるのも仕方ないしね」

「え、なんのこと？」

「兄弟よ、お兄ちゃんよ、あんたのお兄ちゃんの高馬さん！ サツカは文句なしのプロ級、ちょっと近寄りがたいけどけっこうルツクスいいし、そんな人と毎日顔突き合わせてたら、そりゃ佐野くんあたりが好きだつて言ってもどこ吹く風よね」

「はあ！？ そんっ……」

反論しようとした矢先に「百合子、今日行く？」と別の子から話しかけられ、百合子はそっちの方へ話を変えていた。

非常にもやもやとした思いを拭えなかったが、腕時計のデジタル表示はすでにタイムリミットを過ぎている。

名残惜しさを感じながらも、私は早足で教室を出て昇降口へと駆け出した。

2、教室にて（後書き）

どうでもいい補足：佐野君とみどりはほとんど接点ありません。みどりはけっこう美少女…に近いですが地味です。

3、不穏な手紙

靴をローファーに履き替えながら何気なく玄関口の向こう側に目をやった。

私の通っている高校は、グラウンドを通らなければ校門へ行きつかない構造になっており、自然と目につくのは外の部活動をする生徒たちだった。

陸上部の何人がトラックを流して走るその向こうに、白黒のボ―ルを蹴り合っている群衆が見える。

あの中の一人に、たくさんの女の子が黄色い声援を送っていた光景が、ふつと頭をよぎった。

あらゆる筋肉のバネをしならせて、地面を蹴って全力で走る様が、まざまざと浮かび上がる。

私は、黄色い声をあげる女子達の間でじつと眼を凝らし、それを見るのだ。

声を上げず、むしろ気配を殺すようにして、ただ無心に。

それは、とりだしたくもない、いっそ追いやってしまいたいほど鮮烈な記憶。

「あんたのお兄さん、残酷なやつよ」

「え？」

突然かけられた声にひどく驚きながら振り向くと、髪をやや明るく染めている女生徒が、暗い表情でこちらを見ていた。

ネクタイの色を見ると、どうやら三年生のようだ。

個人的な好みの範疇で述べると、大変美人な先輩だ。

けれどこんな美人な人と面識はないし、何を言われているのかさっぱり分からない。

私は、一応周りを確認してみた。

…他には誰もいない。

やはり自分に向けられた言葉で間違いないらしいと観念するしかなかった。

「あの、なんのことですか？私…」

関係ないと思うんですけど、という非常に弱弱しい意見に聞く耳も持てないのか、ややギャル風の美人な先輩はすっと腕を出して、私に受け取れというように顎をしゃくった。

「これ、あなたの兄貴に渡しといて」

「は…？」

「あと、さっきあたしが言ったことも伝えといて。『あなたの元力ノが言っていました』…って。…じゃ」

「あ、あの…」

言いたいことだけ言って立ち去った、自称・兄の元力ノの後ろ姿を見届けながら、私は茫然とその場に立ち尽くしていた。

手の中には四つ折りのノートの切れ端がある。

なんだか不幸の手紙のように、禍々しいオーラを感じてしまう。

なぜなら彼女は、兄に伝えろと言っておきながら、その視線は明らかに私に対する嫌悪をにじませていたのだ。

ひょっとしてこの紙切れには、びっしりと私の悪口が書き込んであるのでは、とすら思えてくるほどだった。

「にしたって…なんで私が…？」

何にしろ、非常に面倒な事態に陥ったことは明白だ。

この紙切れを兄に届けなければならぬということは、少なくとも、

一度は兄と対面しなければいけないということになる。せつかく早く帰ってさっさと家のこと終わらせて寝ようと思っただのに、とんだ厄介事が舞い込んできたものだ。重くなる胃に手をあてながら、仕方なしに渡された紙切れを制服のポケットに押し込んだ、そのとき。

あなたのお兄さん、残酷なやつよ。

伝えろと言われたセリフが、ぶわっと頭に浮かんだ。

残酷、という直截な表現まで持ち出すほどの、どんなひどいことを兄はやったのか。

考えたくもないのに、あの兄のことだ、どんなことを強いていようとおかしくはないと容易に想像がついた。

（きょうだいというだけで、私には何も責任なんてないはずなのに…こんな不安まで抱かなくちゃいけないなんて、納得いかない。理不尽すぎるよ）

帰る足取りは当然のこと重くなった。

4、秋良高馬

私の兄は、秋良高馬という。

年は二つ上の18歳。

そして私の名前は七倉みどり。

名字が違うが、私たちはべつに義理でもなければ他人でもなく、完璧に血の繋がっている兄妹だ。

では何故名字が違うのか？

私は今、母の再婚相手である義父の姓を名乗っている。

しかし兄は、離婚したときに母が私だけを連れて出て行ったため、必然的に実父の姓のままだった。

そして、私たちと暮らすことになった今も、実父の姓を取らないでいる。

戸籍上は他人だった。

学校のみんなには、兄のファン（？）に私が兄と一緒にいるところを目撃されてからは公表するようにしている。でない、凄まじい妄想からの誤解による恐ろしいやつかみが待ち受けることになる。

（登校から三日で身に染みた）

けど、いたって気にしないような人にまでわざわざ私たちが兄妹だということに触れまわったりはしなかった。

でなければ私と兄は、周りからはじゅうぶんに他人として映るからだ。

兄は、何につけても実父の影響が強い。

いまだに独特の関西弁で話すのもそうだし、家庭環境、価値観、生活習慣、文化、何から何まで私たち家族とは一つもかぶらない。

そう、実の兄妹でありながら、私たちにはまったく共通点がないのだ。

それに、転校を繰り返していたからか、それとも飲んだくれだった（らしい）父を一人で支えてきたからか、同年代の人より世慣れているし、妙に落ち着いているしで…。

とにかく、私と血を分けていることなど一つとして感じさせない人が、私の実の兄、秋良高馬という男だった。

当然だろうが、私は、兄を兄とは思っていない。

兄の方でも、私を妹とは思っていないだろう。

なにしろ私が兄と「家族ごっこ」をしなくちゃならなくなったのはつい最近のことだ。

一緒に居た時間よりも離れて暮らしていた時間の方がずっと長い、そんな家族を家族とは呼べない。

それでも、最初の頃はまだ「らしく」しよつと頑張っていたように思う。

けれどその努力も、瞬く間に泡と消えた。

最初に放棄したのは兄の方だった。

…いや、あの人は放棄どころか、はなっから何もするつもりがなかったんだろう。

私は、実らない成果をアテにしている子ぶれるほど、大人でも子供でもなかった。

4、秋良高馬（後書き）

どうでもいい補足：兄の高馬はバリバリにオマージユというか、原型があります。知ってる人は知ってるサッカー漫画の某キャラです。

5、感動の再会

私たちが互いに「家族」として引き合わされたのは、ほんの3年前のことだった。

それも、アルコール中毒で早々にこの世を去った実の父の葬式の席で、だ。

実の父と兄がいることは聞かされていたものの、実父がアル中で死期が近いなどは教えられていなかった。

まさに寝耳に水状態の私に実父の死を悼んでいられるような余裕はなく、むしろ何故教えてくれなかったのかという憤りや不満の方が大きかったように思う。

喪に服す母や義父があれこれと生前の父のことで話しているのを横目で見ながら、私は、実の兄であるという、一度も会ったことなかった兄の様子を目の端で気にしていた。

私の目には、格別悲しんでいるようにも悄然としているようにも見えなかった兄は、当時は今の私と同じ16歳だったにも関わらず、とても頼もしく映った。

今後どんな形になったとしても、彼のような兄が持てたことを誇らしく思うだろう、とまで確信させるほど堂々としていた。

最初は一人暮らしを決意していたらしい兄を、母が必死に説得し、同居にまで至らせた際には、私は喜んですらいたかもしれない。

だが第一印象と、実際会ってからの印象とでは、がらりとその評価が変わっていった。

『みどり、あなたのお兄ちゃんよ。今日から一緒に住むって話して

たでしょ?』

『うん...』

『ほら、あいさつは?』

実の兄にあいさつを強制する実の親というのも変な感じだ。そう思いながらも、私は申し訳程度にぺこりと頭を下げた。どういいうわけか恥ずかしくて兄の顔が見れず、言すべき言葉も思いつかなかったので、とりあえずそうしたのだ。

『何恥ずかしがってんのかしら、この子。覚えてないかもしれないけど、3歳までは一緒にいたのよ?』
そんな太古の昔のことを持ちだされても、覚えている方がおかしいことに気付いてほしい。

母のおしつけがましい感動の再会シーンにうんざりとしていたとき、それまでだまって成り行きを見守っていた兄が口を開いた。

『かまへん。そんなん、覚えてもへんやろ、その子。俺かて、おふくろと住んどった頃の記憶なんぞとくにのうなっとるわ』

その一言による効力といったら半端ではなかった。

緩い緊張感で満たされていたその場が、瞬時に凍りついた。

遠慮のない言い方、少し剣呑とした感じにも聞こえる関西弁、そして何より、私のことを「その子」と、なんの気もなしに口にした事実。

この人は、私たち...いや、私と家族になることなど、考えてもいないのだということが、たったの一言でありありと伝わってきた。

そう思い知った時、私は顔をあげて、初めてまともに兄を見ていた。背が高かった。

そして細身のわりには筋肉質で、見上げた先のその顔は……

自分とまったく似ていない。

タレ気味でぎよろつとした目と、精悍で無駄な肉のそぎ落とされた、どこもかしこも鋭い顔立ち。

高い鼻に薄い唇、目立つ八重歯、堅そうな黒い髪……。

これが、こんな人が、本当に私の実の兄なのだろうか？

本当に？

懐かしさや慕わしさなんて、微塵とも湧いてこない人だというのに。

「これからよろしゅうな、みどりちゃん？」

人を食ったような笑いを浮かべながら兄がそう言ったところで、私たち家族の感動の再会とやらは幕を閉じた。

6、兄ちゃん(前書き)

6、兄さん

絆とか縁とか、そんなもの信じるつもりもないけど、血の繋がった兄妹なのだから少しは何か感じるものがあるのではないかと思っていた。

けれど本当に、「他人だ」ということ以外、彼に対してまったく感じられるものはなかったのだ。

けれどその時は、それに関して否定的な感情は湧かなかった。

10年も離れて暮らしていて、それも一緒に居た時の記憶がないのなら、いくら血縁とはいえ案外と素っ気ないものなのだろうと自分なりに解釈していたからだ。

けれど、その素っ気なさの本当の原因は実はすべて兄によるのだと同居を始めて1週間と経たずに知れることとなった。

第一に彼は、「お兄ちゃん」と呼んでも絶対に返事をしない。

体中から勇気を振り絞って口にした「お兄ちゃん」が完璧な無視をくらってから、私は極力兄を呼ばないようにしている。

どうしてもそうしなきゃならないときは、他人行儀に「兄さん」と呼ぶ。

兄も、「兄さん」と呼んだ時ならば、明瞭ではないものの何らかの反応を示すようだった。

第二に、兄は質問には全て上っ面な答えを返すやり方で通した。

本当なんだか嘘なんだか分からないような話でごまかすのがうまいのだ。

核心に触れるような質問などは、虚実織り交ぜたようなエセくさい

話を誠実という塗料で上塗りして返す。

兄の、本当に誠実な話なんか、少なくとも私は一度も聞いたことがない。

そして最後に、昔の私たちの話など振るのも振られるのも嫌というように、家族だんらんは確実にボイコットだ。

兄は高校三年になるので進学だ就職だなんだと忙しそうだが、かといって家族と話せないほど多忙かといえば、実はそうでもないのだ。時間のやりくりがうまい人だったので、生活のサイクルには常に余裕がある感じだった。

私たちに分かせない程度に、用事を無理やり作っているような気さえした。

とまあ、万事こんな調子だったので、兄が、遺伝子上でしか私たちを家族と認めていないことはすぐに知れた。

両親の言いつけには表面上従っている様子を見せるが、その実バレない範囲で何をしているのやらわかったものではない。

10年近く放っておかれていまさら家族ごっこなどできないというのは、正直分かる話ではある。

けれど、兄ほどに自立心も生活力もある人が、じゃあどうして母の説得に応じてこの家で暮らすことを決断したのか。

一緒に住んでいるから譲歩している、という程度でしか、兄は母にも義父にも敬意を払っていない。

まして私などには、話しかけることすらないのだ。

そんな不安定な家族は、当然のこと不協和音を奏で始めた。

両親は腫れものに触るように兄に接し、私は私で、最初の1カ月を過ぎた頃には彼に関わろうという気持ちなどすっかり失せてしまっていた。

ただ一人、兄だけが常と変わらない様子でマイペースに暮らしている。
淡々と、その内面はまったく見せることなく、ただ淡々と。

7、家庭事情

「…今日に限っているし」

友達の誘いを振り切って帰ってみれば、玄関にあるアディダスの黒い継ぎはぎランニングシューズを確認し、肩がますます下がってしまった。

兄のロードワーク用の靴だった。

イコール、いつものランニングには行ってない、イコール、この家の中にいる…。

…まったく気が滅入る話だった。

私たちの両親は互いに仕事を持っており、割合家にいない時間が多い。

そうになると、必然的に家の仕事は居る者で補わなければならなくなる。

しかし、全国大会に出場するほど実力のあるサッカー部に在籍している兄は、大半の家の雑事をこなす時間がない。

そのためお役はほとんど私にまわってきて、炊事洗濯掃除、学校から帰ってからはおさんどんもかくやというほどの主婦ぶりを発揮しなければならなかった。

外での素行など知れたものではない兄はサッカーに関してだけは真剣で、その腕前たるや高校サッカー専門の雑誌記者から何度か取材を受けるほどというから驚きだ。

ゆくゆくはプロへ行くのではと周りがささやくのも頷けるほど、とかく兄のサッカーへ対する傾倒ぶりは尋常ではない。

両親もそれだけは手放して兄を受け入れており、私には彼の手助けをするようにと口が酸っぱくなるほど言い聞かせている。

そのため、自然と家の雑用は私が請け負うことになってしまった。

もちろん不平不満はいっぱいある。

けれどどういうわけか、私はまるで習慣のように、決められた予定を実行するように毎日、早々に帰宅してはそれらの雑事をこなしていた。

もともと帰宅部で、これといった趣味もなかったから、時間だけはたくさんあった。

ときどき、さつきみたいに友達から誘いを受けることもあったが、百合子のように人脈が広いというわけではないので本当に時々だ。

だから、もっぱら、高校生活に入ってから私は家事に奮闘しまくっていた。

とりあえずは夕食の支度と風呂掃除を優先しなければならぬ。

兄がいることに多少の不安を感じるものの、彼が私へ興味を向けることは万に一つもないに等しい。

夕飯ができていれば「作ったんだな」とか、お風呂が綺麗になつてれば「洗ったんだな」とかその程度の認識だ。

気にしている方が馬鹿らしいと考えて、制服を着替えるために二階の自室を目指して階段に足をかけた。

そのときだった。

8、電話

『……………』

かすかだが、何かが耳に届いた。

おそらく兄だろう。

けれど、兄はいつも何をしているかなど物音でも分からせないというのに、今日はやけにうるさい。

私が帰ってきていることに気づいていない可能性が高かった。

なにやってんだろ？

興味本位で、まったくの面白半分で、私は足音を忍ばせて階段を上がることにした。

『……………』

ボソボソとして聞き取りづらかったが、誰かと会話しているような感じだ。

しかし玄関には他人の靴など見当たらなかった。

ということは、電話でもしているのだろう。

兄の部屋は、階段を上がって手前にある私の部屋の、隣の隣、つまり奥の方にある。

階段をあがりきったところで、壁に張り付いて奥の部屋の様子を伺うと、音が聞こえた原因が分かった。

兄の部屋の扉が数センチほど開いていたのだ。

音を立てないように慎重に足を運びながら、私は息を潜めて耳を澄ませていた。

『しゃーから、あいつのことなん、なんも知らん言つとるやんけ』
少しかすれ気味でハスキーな男の声。

いつまでたつても耳慣れない独特の関西弁。

紛れもない兄の声が、今度は正確な言語になって耳に入ってきた。

途端に、私は思い出していた。

学校の下駄箱で渡された、元カノらしき人からの手紙と伝言のことを。

あれを兄に伝えることなんてできるのだろうか？

（ あんたのお兄さん、残酷なやつよ ）

あんな身も蓋もない言葉を、いくら実の兄とはいえ…。

思わず制服のポケットに手をつ突っ込み、受け取ってきた紙切れを握る。

紙切れは私の握力に耐えられず、くしゃっとひしゃげた。

9、衝撃

「お前の告白なんぞ聞きたないっちゅうねん。…はあ？なんや俺んことか。あほう、真正銘の兄妹じゃボケ」
瞬間、どきりと胸がなった。
会話の内容に私に関係ありそうな言葉がでてきたからだ。

きょうだい。

あにいもうと。

あの人の妹という位置は、今のところ私しかあてはまらない。

「……お前、ほんましょーっもないな。ほんまのアホやな。実の妹つかまえて欲情もクソもあるかい」
私は思わず耳を疑った。

「そらな、確かにな。まあ顔は俺に似て可愛い部類っちゃそうか知らんが。…アホ、言わせ。そや、体もけっこういいセンいっとなで。あれは着やせするタイプっちゅうやつや。真面目そうな顔しとるけど中々やらしいで。……くくっ、しゃーからなんべんも言わすなや。そっいうんとはちやうねん。あくまで、客観的意見の範囲やろっが」

なに？

なに言ってるの？

なんなの、これ。

本当に、「あの」兄がしゃべっているのか。

私のことを？

「あー…そこまでは知らんな。そんなん自分で聞きいや。…は？そ

の役立たずの兄貴に妹のスリーサイズ聞いとんのはどこのどいつやねん」
その言葉が耳に入った瞬間、私は全身が燃えるように熱くなったのを感じていた。

信じられなかった。

兄は、いつもの兄は、私のことなんて少しも興味を向けていないはずなのに。

それも、これはまったく嬉しくない類の興味だ。

怒りと羞恥、そして計り知れないほどの軽蔑が生まれる。

気持ち悪い。

妹としてでなく、女という視点から私に干渉してくるなんて許しがたいことだった。

「お、アカン。そろそろ時間や。ほんなら、明日な」

通話の終わりを予感させる言葉が耳に入ってきてても、私は廊下の壁に張り付いたまま動くことができずにいた。

それほどの衝撃が、私の全身に雷のように打ちつけられていたのだった。

扉の隙間を凝視したままでいると、部屋の中で衣類が擦り合わさった時の、独特の音が響いてきた。着替え始めたらしい。

立ち去ることも自室に隠れることもできないまま、私は足が床に縫いつけられたかのように、そのままの体勢でじっとしていた。

着替え終わった兄が部屋から出てきても、それでも、動くことはできなかつた。

10、空虚な売り言葉

「…なんや、帰っとつたんか」

廊下で立ち尽くす私に気付いた兄が、1メートルほど手前で足を止めた。

私が立ち聞きしていたことを、おそらくこの兄は分かって言っている。

まるで何事もなかったかのように飄々とした態度に恐怖といら立ちを感じた。

「…今日、お父さんも、お母さんも、いないから」

「そらそやったな」

兄は、本当に何も感じていないように、普通に接している。

何なの、その余裕？

曲がりなりにも実の妹を侮辱しといて何の弁解もなし？

なんで黙って通り過ぎていけるの？

信じられない。

人としてどうかしてる。

「…ち悪い」

我慢できずに、正直な感想がこぼれ落ちた。

それはまったくの無意識だったものの、兄へ向けずにはいられない感情のかけらだった。

「あ？なんか言ったか？」

「気持ち悪いよ、サイテー！人のことなにしゃべってんの！？変な

目で見ないですよ！」

私はその時、完全に取り乱していた。

後になってみれば、もしくはもう少し冷静さを取り戻していたら、私が言っていることがどれだけ被害妄想に満ちていたか、気づけたかもしれない。

けれどこの時の私は、兄の常にない生々しい人間臭い部分に振れたことで動揺しまくっていた。

兄が、私をそんな風に見ることが、どうしてだか許すことができなかったのだ。

「はあ？何を言うてんねん。盗み聞きかて、立派にサイテーな行為やぜ。なにのぞいてんの？」

兄が厭味つたらしく似てない口真似をしたので、私はさらにかつとなつて言った。

「話すりかえないですよ！そっちが…、そっちの方が最悪でしょ！兄のくせに、なんでそんな気持ち悪い目で見れんのよ！今まで私のことずっとそんな風に見てたの！？サイテーサイテーサイテー！！もう出てつてよ！！この家から出てつて！！あんたなんか私の家族じゃない！！兄さんなんかじゃない！！」

はあ、はあ、と肩で息をしながら、私は溜まっていた思いをとうとう言いきつた。

何かが発発してしまったのだった。

同時に、激しく警鐘が鳴っていた。

『これ以上かき乱さないで、暴かれそうになる』

けれど、何の深い考えもなしに口にしてしまった言葉たちは全てが希薄で、相手に届く前に弾けて気泡になるだろう類の、うちもない中傷に過ぎなかった。

聡い兄は、すぐにこれに気付いた。

そして容赦なく攻め立ててきた。

「話すりかえる？誰が？最初っからおんなじ話やる。お前、言うてること全部自分に返つとんで。ほな、盗み聞きしとつたお前はなんやねん。人の電話の内容コソコソ聞きよつて。気いわるい。気持ち悪いと思うんなら関わらんかったらええ話やる。こつちかて気持ち悪いわ。家族やないとか、何いまさらなこと言うてんねん」

11、警鐘

無表情に、冷静に言い放った兄は、私の話などに付き合っていないというように、通り過ぎようとしている。

いつものロードワークへいく格好の、黒いジャージの上下を身にとって、上着のジッパーを閉じようとしていた。

もう、これで喧嘩は終わった。

兄は、私を視界から外し、そして世界からも除外する。

彼は瞬時に脳みそのモードをサッカーへ切り換えることができるから。

けれど、そんなことは許してやらない。

「ちょっと待ってよ」

ナイロン素材の上着の袖をギュツと掴んで、そうはさせるかと制止させた。

「関わるなとか言うなら、私や家族に迷惑かけないでくれる？なによ、これ」

ぎゅっと握ってくしゃくしゃの紙くずになった例の手紙を突き出して、兄の胸、心臓の部分に強く押しあてた。

兄は怪訝な表情でわずかに眉根を寄せながら、拳の中のものを受け取った。

「さつき、学校の昇降口で、元カノっばい女から渡されたんだよ。

だれかさんと類友みたいで、自己中で人の話聞かないから、私が渡すしかなくなっただよ。関わるなとか偉そうに言うなら、まず自分がちゃんとしてよ。私が知らないと思ってんの？お母さんとお義

父さんがいないとき、夜中、誰と何してんのか」

「……………」

「…気持ち悪い。関わりたいわけじゃない、こつちだって、好きで関わってんじゃない！！関わらざるを得ないんだよ、何でだか分かる？ねえ、分かっている！？きょうだからだよ！！気持ち悪くても血が繋がってるからだよ！一生つ！嫌でもっ！！」

血を吐く思いでそう言って、私は何故か泣きながら息を乱していた。怖いとか、気持ち悪いとか、むかつくとか、そんな簡単な感情では言い表せないものが、腹の底でぐるぐる暴れまわっている。それを吐き出したくても、何て言えばいいのか分からなくて、また涙が溢れてくる。

「あんななんか…っ、あんななんかに、会わなきゃ良かった！」

気がつけば、私は兄の顔を見ずにその場から走り出していた。

家にいたくなかったので、階段を駆け下りて、靴も履かずに外へ出た。

それは、まるつきり逃げたのと同じことだったので、それが悔しくて、堪らない。

けれどもう、それ以外にはどうしようもなかった。

『これ以上かき乱さないで、暴かれてしまっ』

警鐘が、強く、強く鳴っている。

こんなにも息苦しいのは、その警鐘が体に言い聞かせているからだろうか。

これ以上、何も知ってはいけない、と。

12、公園

あてもなく走り回っていたつもりだったが、気づけば小さな公園に着いていた。

そこは、小学校低学年の頃に頻繁に遊びに来ていたところで、中でもお気に入りだった、公園の中央にある大きな滑り台に懐かしさを掻き立てられた。

当時は造られたばかりだったのか、ゾウさんに見立てた滑り台は全体的にパステルなカラーリングでとても可愛かったのを覚えている。

けど、目の前にあるのは、塗装が剥げ落ちて錆びと薄黒い染みに覆われた、得体のしれない生き物だ。

ゾウさんの特徴である大きな耳の部分は、誰かが壊したのか片方だけ取れていて、一見しただけじゃゾウさんとは判別できない。

おまけに長い鼻の部分が滑り台となつているものの、その鼻の塗装がほぼ丸ごと取れているので、ただの滑り台にしか見えなかった。

「はは……」

気分が最低に落ち込んでいるときにさらに落ち込むようなものを見せられ、思わず自虐的な笑いが漏れる。

（なにやってんだろ）

頭が冷えてくれば、ただひたすらに恥ずかしさが胸を占拠した。なにを取り乱していたのだろうか。

思い返せば、あれは喧嘩ですらなかったに違いない。

一人で癩癩を起こして、一人で叫び出したに過ぎない。

兄はそれを迷惑そうに見つめる傍観者だった。

「なにやってんだろ、私……」
冷静になった今でも燻り続けているもやもやは、まだ腹の底で渦を巻いていた。

怒りでも羞恥でもない、恐怖でもないこの感情は、一体何という名前なのだろう。

一番似通っているのは気持ち悪いんだけど、それは感情という括りに入れてもいいんだろうか。

思い悩む私に、泣きつ面に蜂というような事態が起こった。

頬に一滴の雫が落ち、雨が降り始めたのだ。

運がいいのか悪いのか、ゾウさんだった滑り台の胴体部分には空間があり、丁度雨宿りには良さそうだったので躊躇わずに中へ入った。

だが、座ろうとした時、足に鋭い痛みを感じて驚いた。

そういえば素足のまま、おまけに制服を着たまま出てきてしまったのだ。

痛みを感じた右の足裏を見ると、真っ黒に汚れている上に、一か所から血が出ていた。

痛くて、また泣きたくなる。

たまらず涙が滲んできた時、さっきの兄の表情を思い出していた。

理解のできない人間を目にした時のような顔を見れば、絶望には事足りた。

血の繋がりがあろうとも、彼とは何も分かち合えないのだろうか。

13、理想と現実

(どうしてこんな風になっちゃったんだろう)
もちろん自分が原因だってことは百も承知の上だ。
けれど、確か私は、「きょうだい」というものにひどく憧れを抱いてはいなかったか。

少なくとも二年前までの私は、確実に兄に対して様々な理想を宛がっては喜んでいた。

いつか再会できるだろう、成人して、働くようになって、一人暮らしでも始めたら、母に聞いて父と兄の所を訪ねてみよう。

母が答えない場合は、自分で調べてみようと思っていたのだ。

それなのに、現実はどうしてこう容赦なく何もかもをぶちのめしてくれるんだろう。

別に、理想通りの兄や家族なんて、そこまでは望んでいない。

ただもう少しだけ、兄が歩み寄ってくれれば。

ほんの少しでいいのだ、壁を低くしてくれたら……。

……。

(驚いた。私って実はけっこう兄が好きなの…?)

そんなはずはない。

あんなふしだらで得体の知れない男を、実の兄として許せるはずがない。

(でもそれならどうして、こんなに兄を気にしてるの)
嫌悪しているからだ。

行動がいちいち目につくのだ。

それだけ。

……ただそれだけのことだろう。
いやだ、あまり考えたくない。

あなたのお兄さん、残酷なやつよ。

元力ノらしき美人の声がする。

考えたくない。

私は膝を抱えてしゃがみこみ、頭を膝の間に伏せた。

今はまだ、何も知らず、何も理解できないままでいいのだ。

そうでないと何もかもすべてが壊れてしまう気がした。

私は、恐れているものの正体を、本当は知っているのだ。

14、家族写真

『何やってるの?』

目の前で、兄がライター片手に写真に火をつけているので、私は思わずそう聞いていた。

扉の隙間から様子をつかがっていたことも忘れるほど、その行為が常軌を逸していたからだ。

『なんや、帰ったんか』

どうでもいいように呟いた兄は、私の質問に答える気などないらしく、また新しい写真に火をつけようとしている。

その写真の中に見知った顔を見つけた時、私はとっさに兄の腕にすがっていた。

『ちよつと…何してんの!?それって…』

実の父の写真。

おそらく兄にとってはとても大事なものはずだった。

けれど兄は、取りすがった私を突き放して、父が遠くでこちらを向いているその写真に、またゆっくりと火をつけはじめた。

『大人しくする気がないんやったら、いねや。…見とるんやったら黙っとれ』

珍しく、兄が拒絶もせずになんかことを言ったので、私は思わず口を閉じてその行為に見入ってしまった。

突き放しているように聞こえるかもしれないが、「黙ってるなら居てもいい」なんて、普段の兄だったら逆立ちしたって出てこないセ

リフだった。

不気味なことこの上ない行動ではあったが、兄の顔つきがいたって真面目で、私はなんだか、そんな兄を新鮮に感じてしまって、文句も言わずにその場に残ることにした。

机の上に置いてある数枚の写真たちは、ほとんどが古いものだった。そしてよく見ると、それらは私たちがまだ家族として機能していた時代のもので、幼少期（おそらく2、3歳）の兄や私が母や実父と一緒に笑い合っているようなものばかりだった。

私にとっては懐かしさのかけらもないが、兄にとってはそうではないはずだ。

兄の中では、家族は実父ただ一人なのだろうということは、言外に知れていた。

そのただ一人の家族の写真、遺品とも言えるそれを燃やすなど、ただ事ではない。

その行為の異常さは、私たち、母、養父との写真を燃やすという行為の方が、まだしも理解できるほどだった。

15、昔の話

『お前は覚えてへんかもしれんがな…』
一体この人は何してるんだろう、と怯えきつているところに、兄がふいに穏やかな声で切り出してきた。

私は心底驚いてしまった。

今日は一体なんという日だろう。

明日は槍でも降ってくるんだろうか。

兄が、あの兄が私にこんな話しかけてくるなんて。

『小さい頃は、よう野球観に連れてつてくれたんや…。俺は野球やのうてサッカーの方が好きやと言うとるのに、絶対に聞いてくれへんかった。ダメな親父やったかもしれんけど、なんでか憎めんところでな…』

それを聞くのは不思議な心地がした。

兄が家族のこと、まして実父のことを話すなんて、まるで天変地異の前触れだ。

そして、兄の顔はいつになく誠実だ。

そつだ。

誠実なのだ、あの不誠実でふしだらな兄が。

『お前は娘やからつちゆうことで、よう可愛がられとつたわ。俺はなんや、両親をいっぺんに取られたような気いになって、気い悪くてあかんかった。せやけど、俺も…』

『…何？』

『…いや、昔の話や』

その昔の話が聞きたい。

少なくとも今の、無表情で、けれどどこか懐かしそうに目を細めて写真から上がる炎に見入っている兄は、私にとって、その昔とても切望していた「あの」兄なのだ。

たまらずにもっと話を聞き出そうとしたとき、兄は、とうとう最後の一枚を手にしたところだった。

『あっ』

私は発作的に兄の手を握っていた。

ほとんど無心でそうしていた。

その写真を守るのは、なんだか今の誠実に映る兄を守ることになるような、そんな気がうつすらとしたのかもしれない。

『大人しゅうしとれ、言うたやろ』

兄が低く吠えたが、私はかぶりを振ってただただ両手に力を込め、兄の手を握っていた。

すると、真上から呆れたような声がため息交じりに降ってきた。

『……お前には、もう関係あらへんやろ。お前には親父がある。それは、こいつやない』

兄の言葉は至極当然であって、私の方でも、反論する言葉など持ち合わせていなかった。

けれど、どうしても、手を離すことが出来ないのだ。

『はよう、手え』

『でも』

『でも、なんや？』

『…でも』

16、忘れられた交流

私は、考えなかった。

考えても、この行動に対する理由がまったく思い浮かんでこなかったからだ。

『でも、家族だもん』

そう言っつて兄の顔を見つめれば、相手はひどく驚いたようで、ぎょろりとしたタレ目を見開いてこちらを見ている。

『……………』

『お父さんも、兄さんも、私の家族だよ……………』

その答えは、自分でも全くの予想外だった。

家族だと思ったことなど、一度もなかったというのに。

ステンレス製の灰皿の中には、消し屑になった写真の残骸が、黒く溜まって残っている。

『兄さん、』

不安になって声をかけようとした私を遮るように、兄は私に正面から向き直って言った。

『ええか、今見たんは忘れろ』

『どういうこと？兄さんは……………』

『忘れる。お前はなんも見んかった。元から写真なんてもんはなかった。それでええ』

兄は、私の両肩をぐっと掴んで腰をかがめ、ゆっくりと視線を合わせてきた。

いつも、どんな感情を浮かばせているのか分からない瞳に、強い一筋の光が見える。

『忘れる…』

呟いた私に、兄は噛んで含めるように言い聞かせた。

『せや。その方がええ。お前には今の家族がある。俺らはおたがい干渉せんで、興味も持たんでおった方がええ。その方が、ええんや』
私は反射的にこくりと頷いていた。

それほど、兄の声には抗えない力のようなものが宿っていた。

その後、私は本当にその出来事を忘れようとした。

兄の部屋から出るときには「はよ、いね」と、もういつもの調子に戻っていたので、私は強く強く念じて、忘れる忘れると言いつつ聞かせたことで記憶の奥深くに仕舞いこんでいた。

けれど、何故忘れる事が出来たんだろう。

あの時の兄は、確かに、私に誠実な面を見せていた。

あれこそが、私の望んでいた兄だ。

優しく、誠実で、頼りがいのある、けれどどこか不器用で憎らしい、兄。

普通の人より何かを超越しているようで、でもどこにでもいそうな、そんな人。

私の自慢の兄。

17、悪夢

『せやけど、ええ子ちゃんのみどりは、俺の汚い部分なんぞは絶対に許せへんのやろ？』

そんなことはない。

兄がちよつとでも私に向き合ってくれたら、私の存在を認めてくれさえすれば、私は何もかもすべてを許すことができるだろう。少しでも優しさを見せてくれれば。妹として認めてくれたなら。

『妹なんぞいらんわ。女やったら…相手せんこともないで両親のいない日に響いてくる女の声。』

兄は、甘ったるい睦言を吐いて、優しく女を抱き寄せている。

扉の隙間？の視界で繰り広げられる、吐き気のする行為。

『あ、あ、いい、あああ…！たかまあ！』

『はっ、はっ……っ！』

ねっとりとした空気の部屋で、服を着たまま絡み合っているその現場を、私は何度も目撃してきた。

許せない。

とても許すことなんてできなかつた。

なぜあんな人が私の兄なの？

なぜ私はあんな人の妹なの？

『あ、ああっ…、兄さん…っ』

『……どや、兄貴に抱かれる心地は？こうされたかつたんやろうが』

？けど、兄貴に抱かれないなんちゅう女なんぞ、それこそいらんわなあ……」

いつのまにか私は兄の腕の中にいて、激しく抱かれていた。

これは夢だ。

いつもの悪夢。

私を抱く兄の顔が歪んでいく。

耳の中でずっと鳴っているのは、あのときの呪文のような兄の言葉。

忘れる。お前はなんも見んかった。

そうだ。

私は何も見ていない。

何も知らないままだ。

兄さんが…

あの兄さんが…

扉の隙間？の向こう。

私が本当に忘れていて、本当の「忘れるべき出来事」…

あなたのお兄さん、残酷なやつよ。

そうだ、この言葉も忘れなくちゃいけないんだ。

綺麗な女の人は、きつと「知っている」人だった。

せや。それでええ。その方がええんや…

その方が…

しとしと……という音が、どこかから聞こえてくる。
紗にかかった様に、意識は急速に明瞭さを失っていく。

18、迎え

しとすと…という静かな音で目を覚ました。

滑り台の下で雨宿りをするうちに、どうやら眠りこんでしまったようだった。

またも後味の悪い夢を見ていた気がするが、掬い取ろうとする瞬間に記憶は霧散した。

もうかけらも思い出すことができそうにない。

目をこすりながら辺りを見回すと、雨脚はそんなに強くはないようだ。

薄いカーテンに視界を遮られているような、霧のように煙る雨だった。

何かを思い出しそうになるが、やはり掬い取ることはできずに終わる。

私は頭が老化しているんだろうか。

「帰るか…」

そろそろ辺りが暗くなってきた。

雨の降る暗闇の中を一人で歩くななんて物騒にもほどがあるというものだ。

さすがにそれくらいの危機管理能力は持ち合わせていたので、雨宿りを切り上げてさっさと走って帰ろうとした。

「みどりー！」

滑り台から一步踏み出してさあ走ろうと前足を出したところで、誰かが私の名を呼ぶのが聞こえてきた。

聞き覚えのある声だが、その声が私の名前を呼ぶのにはひどく違和感があった。

「兄…さん？」

「みどりー！どこや！」

必死に私の名を呼ぶ兄の声に何かか込み上げてきて、私は発作的に大声で呼び返していた。

「兄さん！」

「みどり！」

どれほど外に居たのか、やがて視界に入ってきたのは、全身がしとどに濡れそぼっている男性。

いつもは立ちあがっている硬い髪もぺつとりと輪郭に張り付いている。

間違いなく、私の実の兄だった。

どういふ風の吹きまわしか知らないが、どうやら兄は私のことを探し回っていたようだった。

それともランニングついでに探していただけだろうか。

そちらの方が、まだ信憑性のある話だ。

「…なんで」

肩で息をしながら駆け寄ってくる兄に、私は戸惑いを覚えずにいられない。

当然だろう。

普段であれば私なんかには少しの関心も寄せない兄だ。

ケンカして出てったくらいで心配するような、殊勝な性格じゃない。

そんな人がどうしてこんなに必死な様子で、関心のない妹を探してきたのか。

19、雨宿り

「お前、平気か…?」

「え?」

雫の滴る髪もそのままに、兄は鋭い視線でそう詰め寄ってきた。私にはなんのことやらさっぱり分からない。

「な、なにが?なんのこと…?」

「お前…:見たんか、あの紙に書いてあったこと」

あの紙とは、もしやさつき渡した例の手紙のことだろうか? 見ているはずもなかったので、首を横に振って否定した。

すると、兄はふうつとため息をつき、あからさまに安心した様子を見せた。

「どう…:したの?」

「どうもこうも…:」

兄は言いかけたが、私の後ろに滑り台があるのに気付くと、早々に雨をしのげる空間へと潜り込んだ。

私は全然この展開についていくことができず、そもそも何故兄が私の反応を気にするのか解せず立ち尽くしていた。

こうなるとなりふり構わずに手紙の内容を確かめておけば良かったと思ったが、後の祭りだ。

「なにしてんねん。はよ来いや」

濡れるに任せて突っ立っていると、兄が力強い腕で体を引っ張ってきた。

私は易々とさつきまで居た場所に戻されてしまう。

雨をしのげる場所は一人ないし二人が限界で、まして兄のようにデ

カイ図体加わるとなればなおのこと狭くなった。

毎日、欠かさずにトレーニングしている筋肉バカな体を嫌でも意識してしまう。

（それでも、無駄な筋肉じゃないのが悔しい。戦うための体の一部でしかない…）

よく張っている太ももやふくらはぎを覗けば、兄の体は同年代の同じ体格の人とそう変わらない。

そして、そつと手首を見ると、漲る筋肉を覆う肌には所々に傷がついていた。

サッカーに対してだけは真剣な人だった。いつだって。

「お前が靴も履かんと出て行きよつたから…馬鹿なことでもするんちやうかと」

答えないかと思っていたけれど、兄は私を探しに来た理由をはつきりと口にした。

それがまた、あまりにも見当はずれなのでまたはぐらかしているかと思つたが、伺い見た兄の表情は思いのほか真剣だった。

私は思わず笑ってしまった。

「…馬鹿なことつて。自殺とか？」

「最悪、な」

「そんなの…」

するわけがない。

そう言おうとして、声が出ていないことに気付いた。代わりに漏れていたのは、みっともない嗚咽だった。

19、雨宿り（後書き）

どうでもいい補足：同年代と同じ体格とはいっても、179？はあります。ポジションはMF。そういう情報が出てこないのは、みどりがまったく興味を持たないせいです。

20、相互不理解

霧雨で湿った頬を、溢れた涙の筋が通る。

「みどり」

これまで一度だってそんなふうに呼ぶことがなかった名前を、今ここで、何度も口にする兄が、許せない。

どうしようもなく弱り切って途方に暮れている私は、甘えたくてしかたがなくなるから。

「兄さん……私、わかってるよ。ちゃんとわかってる。兄さんが私を妹だつて思っていないこと。…だって、私だって同じだから。いまさら兄さんを、兄だなんて思えない」

「……………」

狭い空間で、肌が触れそうなほど身を寄せ合っている私たちを、他人が見ればなんと思うのだろう。

少なくとも、兄妹とは思えないのではないか。

「でも、私はほんとは、少しでもいいから、兄さんに…」

「みどり」

「認めてもらいたかった」

「おいっ」

「家族ごっこでいいから、きょうだいになってほしかった…」

薄暗くて判然としない視界の中、兄が困っていることだけは唯一確認できる。

それだけ分かれば充分だ。

こうなっただらとことんまで困らせてやればいい。

どうせ嫌われている、いや、関心がないのなら、何を言ったところ

で気にする必要もない。

「そんなの無理だつてわかってる、ちゃんと分かってるよ。でも……」
言い募ろうと身を乗り出した時、兄が急に、私の腰に腕を回してきた。

私は驚きのあまり、一度大きく震えて、そしてそれっきり固まってしまった。

「なんも……なんも分かつたらんわ、お前」

耳元に口を寄せて、兄は低く、そう言った。

「わ、か……分かつてる、ちゃんと分かつてるよ！」

腰を抱く兄の腕と強張る体を意識しないように、震え出しそうなのがバレないように、ことさらに大きい声で言った。

けど、兄はそれへ間髪入れずに言い返してきた。

「それが分かつてへんて言うとなんじゃボケ！！……お前つ、……俺が憎たらしいんやろ？気持ち悪うてあかんのやろうが？お前を妹と思うてへん兄貴が、毎晩毎晩何しとるんか知つとるんやろうが！？ママゴトしとるんとちゃうて分かつてんのやろうが……！そういう野郎がっ、……」

「兄、さん」

「そういう野郎が、カスみたいな人間が、実の妹相手にナニしようと気にせんで、知つとるか？」

「何……」

兄は何を言っているのだろう。

そして私に、何を言わせたいのだろう。

「賢いみどりちゃんは知つとるやろ」

「やめて……」

「知つとるよなあ？知つとるはずや。お前は見てたんや、あのとき」

「兄さんやめてよ…！」

記憶の底で、何かの蓋が開けられようとしている。

その中に、私が忘れようとして、けれど本当には忘れられなかった、
欠けた記憶のピースが押し込まれている…。

21、解かれた封印

『はあ、はあ、はあっ…っく、』

警鐘が鳴っている。

強く、激しく、私の脳内を駆け巡る。

乱さないで。

暴かないで。

いやだ。

こんなのはいやだ。

「お前が手渡されたつちゆうあの手紙、何が書いてあったか教えてるか？それでもそないな血迷ったこと言えるんやったら、家族ごっこでもきようだいごっこでも、なんぼでもつきおつたるわ」
「それって、どういっ…」

聞いてはいけない。

反射的にそう思った。

けれど体はすでに兄の腕の中にあり、手も動かせない状況だった。当然耳を塞ぐことはできない。

聞いちゃダメ。

「いい、やっぱりいい、聞きたくない」

「聞けや。あの女、お前にアレ渡したんやったら、軽くお前にも嫌がらせてんねんで。お前が盗み見せんかったのは誤算やろっけどな」

頭の中で、警鐘がガンガン鳴っている。

思い出してしまう。だめだ、だめ、だめ、だめ……

「変態、やて」

『変態。』

「あつ……！」

その二文字が、耳を通して頭の中に突き刺さった。

「変態で、書いてあつたんや。あん女は、俺が誰かの身代わりにしてることに気付いて、しつこく聞いてきた。せやから、教えたつたんや。俺が誰を代わりにして抱いとるか、な。……そしたら、変態やて」

「ああ……っ」

「お前、ほんまに忘れとつたんか？俺がお前に、何したんか……。お前とおつて、いつつもこうしたいって考えとるような奴のしたことを、本気で今まで忘れとつたんか？」

強く抱きしめられても反応できないほどの衝撃が頭を打っていた。

思い出した。

私が本当に忘れてしまっていたこと。

『はあつ、はあつ、うっ、……はあ、はあ、はあ、はあ、はあ』

何故忘れていられたのだろう。

あんなに衝撃的だった、あの出来事を。

兄が口にした二文字が、まるで封印を解除するための呪文だったか

22、真実

二年前の、まだ一緒に住んで間もない頃のこと。

私は今日のように、まったくの興味本位で兄の部屋を覗いた。

扉の隙間、3センチの向こう側。

そこで、私が見たものは……。

『はあっ、はっ、はっ、
くあっ、みどりっっ！！』

荒い息遣い。

うつろな目線。

興味本位で覗いた部屋の中で、兄は私の名を呼びながら自慰に耽っていた。

『あっ、はあっ、はあ、はあ……っ。ああ……みどり、みどり、っ！！』
兄の手の中には、私が昨日洗濯機に放り込んだはずのブラジャーがあった。

最初は、何が行われているのかを理解するまで時間がかかって、自失状態にあったと思う。

けど、兄が私の名前を呼びながら動かしている手が、股間にある、到底目にしたくないグロテスクな物を握りこんでいたので、すぐにそれが忌まわしい、嫌悪感を伴う行為だということに気がついた。そして、気がついたとたんに、私は立っていられなくなった。腰が抜けたのだ。

ガタンッ。

当然兄は気付く。

行為をやめ、扉を開ける。

その時の、蒼白になった兄の顔を、何故忘れていられたのだろう。ポーカーフェイスを崩さず、常に飄々としていた兄の、いっそ笑えるほど人間らしい表情だったというのに。

『みどり、お前………！』

『あ………』

兄は、一度大きく唾を飲み込んだ。

そして震えながらため息をつく、正気を失ったようにこう言った。

『すまん、すまんかった、みどり！』

繰り返しそう言っ、床に頭をつけて土下座した兄に、私は一言、こう呟いたのだ。

ぎゅつとつぶされた胸から押し出された言葉は、まるで悲鳴のようだった。

『変態………！』

「………思い出したんか？」

「どうして、兄さんどうして………だって、兄さんが………！」
忘れると言ったのに。

お前は何も見なかった、忘れると。

それなのに、どうして思い出させたのか。

『わすれる………』

『せや、忘れる！お前は何も見んかった、俺の部屋も覗かんかった
！』

私は、ゆっくりと首を横に振った。

到底忘れることなど出来そうになかったからだ。

『それが出来んのやったら、こっから出てくわ。…二度と、お前らの前に顔見せへん。それでええやろ』

23、愛しい人

「……落ちつけ。大したことやない、そう言い聞かせるんや。俺が言った言葉と、おんなじくらい強く体に言い聞かせ」

「離して!! 離してよ!!」

「離れたらまたどっか行くやろうが! ええか、よく聞き、俺は卒業したらあの家を出る!」

逃れようと身をよじる私を、兄はむりやり押さえながらそう言った。

「に、兄さん…」

「幸い、バカの一つ覚えで、サッカーだけはよう出来る。いくつかクラブから話も来とるし、もしかしたら、国を出るかもしれん。…そしたら、二度とお前らの前に顔見せへん。今日みたいな迷惑もかけへんようになる。…それでええやるが」

何を自分勝手なことを言っているんだろう。いなくなる?

こんなに私を打ちのめして、粉々に砕いておきながら、何も責任を取ることなく出ていくというの。

それこそ、そっちの方が迷惑極まりないと、どうして気付いてくれないのだろう。

「家族ごっこなんぞ、よう出来ん。きょうだいごっこもや。俺は兄貴とちやう。お前は、俺にとって妹やないねん、最初っから…」

逞しい兄の腕できつく抱きしめられながら、私は、必死に胸を落ちて着かせていた。

そして軽く錯乱しながらも、どうして私たちに血の繋がりがあのかを考えた。

それさえ無ければ私たちは、例えば普通に出会って仲良く友達になることが出来たのだろうか。

もしくは義理の兄妹であれば、もし恋愛感情を抱いても、その先に肉体関係を結んだとしても、何も不自然なことはなかったのだろうか。

「私も……そうだった」

「お前はそうやないやろ。兄貴がほしかったんやろ」
離そうとしない兄の腕を、私はゆっくりとほどいた。

今度は兄も抵抗せず、されるがままになった。

少しだけ隙間を開けて兄に向き合つと、兄は少し苦しそうに、何かを我慢するように目を細めて私を見つめている。

あんなに不誠実でふしだらな兄が、今、こんなにも誠実で理性的になつているのが、少し可笑しい。

「俺が気持ち悪いやろ。怖いんやろうが。せやから、関わらんどけ、言つたんや」

「うん。そうだね……本当に、その通りだった」

残酷にも正直にそう言つと、兄の野生動物のようにしなやかな筋肉が、瞬時に強張るのが分かった。

愛おしかった。

これを変態と呼ぶのなら、もうそれで良かった。

生温かい吐息が、濡れきつた頬にかかる。

兄の顔を間近で見るとなんて貴重で、じっくり眺めていたのに、怖くてそれもできない。

視線を反らしがちに仰ぎ見たその先で、射るように、飢えたように私を見る兄の瞳を見つけた。

その中では、兄と同じように餓えた瞳の女が、こちらを見つめている。

似ている。

確かに同じ血が流れていると、私はここでようやく認めることができたのだった。

けれどその事實は、今の私たちにとっては苦いだけで、何の救いにもなりはしない。

そのことだけが、すべてを否定してきた私たちの唯一の繋がりだ、虚しくて、悲しい繋がり。

「兄さん、私、兄さんが…」

だって、今日の前で、同じような表情でいるこの人が、こんなにも好きだと思う。

いったい、恋愛感情であるのか、家族愛であるのか、判断もつかないけれど、愛おしいと思う気持ちだけは確かにあって、こんこんと溢れだすのだ。

あんなに嫌いだと思っていたのが嘘のように、私は兄さんが好きで好きで、仕方がなかった。

そんな私の前に横たわる血の繋がりには、もう、忌まわしいものでしかなくなっていたのだ。

24、告白

「そんなら、鍵、かけとけよ」

玄関の前にたどり着いた時、兄が、さきほどの愁嘆場など感じさせぬほどの平坦な声で言った。

このうえ、日課のロードワークを欠かすつもりはないらしい。

私は、この家に入った瞬間に、せつかく泥濘から掬いあげた真実を取り落してしまう予感がして、一息に告げた。

「兄さん、なんで私たちと一緒に住もうと思ったの？」

ずっと分からなかった。

そんなにも私たちと距離を置きたがる兄が、ではなぜ、再び私たちの前に姿を見せたのか。

兄は立ち止まって、一瞬の間を置いてから、ゆっくりと振り返った。

「俺かてな、人の子やぞ。…お袋と、お前に会ってみたかったっちゆう…それだけのことや」

その顔は、少し視線をうつむけていて、兄に対して初めて年相応を感じる所作だった。

大人びた得体の知れない男だった兄が、やっと現実味を帯びて私の前に姿を現した気さえした。

「そっか…そうだったんだ」

「そっや。…あれこれ、言うたけどな。俺もお前も、ほんまには

家族や。それは変えられへん」

「……………」

「せやから、さっきのことも、お前が見たもんも、全部忘れろ」

「無理だよ…。私が今まで忘れていられたのはね、きつと兄さんに
出て行つてほしくなかったからなんだと思う。兄さんが本気で出て
行くつていう目を、あのときの私は心に刻みつけてた」

正気を失つたように強く叫んだ兄の声が、その鋭い視線が、おそろ
く私に暗示をかけていたのではないか。

初めて、私と兄の利害が一致したから。

「でも、もう…」

一度衝撃を伴つて思いだした記憶を、前のように簡単に忘れ去るな
どできそうになかった。

私が左右に首を振つたのを見て、兄はおもむろにポケットに手をつ
っこむと、何かを探り始めた。

すると、スウェットのズボンのポケットの右側から、紙切れが出て
くる。

くしゃくしゃになっているそれは、よもやあの忌まわしい元カノの
手紙か。

「ほれ。お前があんとき止めた、最後の一枚や。……俺は、寂しか
つたんかもしれん。母親は4歳ん時からずつとおらんで、とうとう
親父ものうなつて、自分で自分に残るもんがなんもないで気づいた
んや。写真があつても、それは変わらんかった。ただの紙切れで、
これは、親父やない、そう思えば思うほど、つろつてつろつて、し
やーない。いつそ燃やした方が、親父の供養にもなるし、俺の気持
ちにもカタがつく、思うてな。そこに、お前がきて、勝手なこと喚
いてこれを残したんを見てな、俺は、やっとお前を妹と思えた。つ
らいんは、俺だけやないのかもしれない、分かった」

その告白を聞いて、たちまちに記憶が蘇った。

常軌を逸しているような、実父の写真を焼くという兄の行動。
そのときの横顔。

鮮明に脳裏に浮かんだ。

私はゆっくりと手を差し出して、くしゃくしゃの紙くずを受け取った。

開くと、そこには、4歳くらいの男の子と、写真でしか見たことのない実父が、公園のようなところで手をつないでいる光景が映されていた。

では、あるとき燃やそうとした家族の写真の、最後の一枚がこれなのだ。

兄は結局、私がしゃにむに守ったこの写真を、捨てずにいてくれたのだ。

26、抜け出せないしがらみ

私は、いつの間にか涙をいっぱい両目に溜めて、嗚咽を漏らすのをこらえていた。

全身に力をこめて泣くまいとしているところに、兄が大きな手で、優しく私の肩をたたく。

すると、その反動からか、涙がぼろり、ぼろりと零れ始め、何かの関を破ったように後から後から止まらなくなってしまった。

胸が、誰かに掴まれたようにぎゅっと締めつけられて、苦しい。

何かの塊が喉へせり上がろうとしていたけれど、吐き出すこともできない。

馬鹿で、無知で、幼稚だった自分を思い知る。

兄の孤独など、想像もしなかった。

超然としている人だから、何もかも全てを割り切ることができる、大人と同じなのだと思っていた。

そうではない。

兄がずつと関西弁を通すのも、私たち家族にははまらなかったのも、ただ実父の影響を受けたことだけではなかった。

実父のことが、本当に好きだっただけなのかもしれないと、ようやくここで思い至っていた。

その気持ちを思うと、自分を可哀想がって泣くより、いつそう悲しくて辛い。

何も分かるうともせずに反抗ばかりしていた馬鹿な妹を、許せなかった。

「けど、分かってもなあ……どうにもできんことは、世の中にはよ

うけあんなや。お前もそのうち分かる。けど、それはまだ『今』やない。お前はこのウチで、おとなしく、平和に暮らしたらそれでええ。不良で変態の兄貴のことなんぞ、おったんかい、ぐらいの気持ちでおるとええんや」

口を開いたら嗚咽が止まらなくなりそうので、私は何も返せなかった。

「そしたらな、何十年とあるうちの、指先ぐらいの事件なんぞ、すぐに忘れられるわ。それで俺もいなくなれば、お前かて、安心して生きていけるやろ」

「……………」

「けどな…………せめてそれは、持つといてやってくれ。お前が自分で残したモンやしな。俺には、記憶がある。思い出もようさんある。」

けど、お前には、なんもないやろ。知らんかったやろうけど、親父はな、親父は、」

そこで兄は、妙に声をつまらせた後、

「…………お袋と…………お前が。…好きやったんや」

少しだけ上ずった声でそう言つと、素早く踵を返し、駆け出して行った。

その背中には、振り返る気配もない。

兄の姿が闇に溶けて見えなくなるまで、茫然と立っていた私は、声を限りに泣きたいのを我慢して、重い足を引きずるように家の中へと入った。

扉の前に、ずるずると沈み込む。

一筋の光もない濃密な闇が、そのまま地の底まで引つ張っていくような心地がした。

薄情者。

言いたいことだけ言って、行ってしまつて。

何の責任もとらずに、かき乱すだけ乱して、出て行ってしまつてくせに。

勝手なことばかりを言う。

そんな兄は、不誠実な兄は、やはり私の兄なんかじゃない。

私はそんな兄が、嫌いで嫌いで、仕方がない。

そのはずなのだ。

「うつ…うつ…うつ…」

無理だと思つた途端に我慢していた嗚咽が漏れた。

選ぶ暇もなくつきつけられた道には、前へ進めば進むほど抜け出せなくなる、濃いしがらみが用意されている。

私は否応もなく、そこを進んでいくしかないのだろう。

忘れろと言つた兄こそ、馬鹿で、無知で、幼稚なのかもしれない。彼の言うこと、すること、何もかもが、私にとっては強烈に記憶に残ってしまうことを、知ろうともしないのだ。

そうか。

きょうだいというのは、そういう、どうしようもないところだけ、似てしまうものなのかもしれない。

エピソード

いつのまにかまた振り出した雨音を聞きながら、私はのろのろと準備にとりかかった。

何があっても日常はやってきて、私たちは物を食べ睡眠をとり、生活を繰り返していく。

そして私は兄の妹で、家事をこなし、この家での責任を果たす役目があった。

家族だ。

何があっても。

どんなに思っていても。気にかかっても。

家族であり、それ以上でも、以下でもない。

さつき兄は、そう示したじゃないか。

階段を登って、踊り場にある窓から外を見れば、外套の頼りない光に照らされた雨が、けぶるような霧雨となつて街を覆っている。

私はその閉鎖的な光景から目をそらそうとして、すぐ踵を返そうとした。

そのとき、兄のあの言葉が、頭の中で鳴り響いた。

それでええ、その方がええんや。

『あなたのお兄さん、残酷なやつよ』
その通りだった。

残酷なくらい優しい兄は、やはりふしだらで、不誠実で、大嫌いな

兄だ。

一生、それ以外の、なにものでもない。

強く言い聞かせて、わたしは一步、また一步と、仄暗い階段を登り始めた。

浅い夢の名残は、雨に溶けるように霧散していた。

終

あとがき

こんな陰鬱で悲惨でくらーい話を最後まで読んでいただいた方、ありがとうございます。

ほとんど自己満足の兄妹論を展開させてしまったので、もしハッピーエンドを期待されていた人がいましたら、大変申し訳ありません。「現実を逸脱したきょうだいが現実に立ち返る」、というコンセプトだけは、どうしても曲げられませんでした。

この話を書き始めたのはおよそ5年ほど前でした。

もともとこの二人は別の話に登場させたのが最初で、その話では兄妹ではなく幼馴染みという設定でした。

この話よりは明るいですが、みどりと高馬自身が恋愛体質ではないので、その話でもかなり地味でシリアスな役割です。どうしようもない主人公。

しかし、もちろんハッピーエンド。

ではなぜ、こんな重たくてインモラルな話に踏み切ったのかと言いますと、理由はひとつ、書きたかったからに他なりません。

というか、当時ものすごく実のきょうだいものにハマっていただけです。

大好きなサイトさんの話や某掲示板のパロ、漫画などできょうだいものを読み漁っていた時期、ほとんどが禁忌を貫き通してしまう、あるいはハッピーエンドでして、それでは物足りなくなってしまうほど兄妹設定にハマってしまったのでした。

私は、もちろんハッピーエンドや禁忌エンドも好きなのですが、誰か一人でも「きょうだい」「血縁」「家族」の部分を大事にする書

き手がいてもいいのでは、と考えていました。

恋愛感情や肉体関係を抜きにしても、「血縁」というつながりによって惹かれ合っているのではないか。

それこそが究極のインモラルではないか。

などというへビーな考えにいきつき、「じゃあ自給自足しよう」となったわけです。

とはいえ、すでに既出の自キャラで間に合わせたあたり適当さ加減が出てしまっているわけですけども。

「現実を逸脱したきょうだいが現実に立ち返る」というコンセプトを重要視しましたが、もうひとつ重要視したのが「プラトニック」です。

別にプラトニック推進派でもなんでもないですけど、むしろエロは大好物ですけど、きょうだいものを書くにあたっては絶対にやめよう、未遂で終わろうというのは決めていました。

肉体関係は、どうにも生々しい上にポルノ小説のようになってしまいうそりで、私の場合。あと、やっぱりセックスしたらどうしたって普通のきょうだいに戻るのは難しいですね。

私が一番書きたかったのは、恋愛一步手前の微妙な感情だったので。

「兄妹以上、…」のみどりと高馬は、おそらくこの後も仲悪い感じで生活し続けるでしょう。

でもきょうだいって、なんかいつの間にか仲良くなったりしますよね。

でもって遠慮がないから、まあ、予想外な展開に行きついたりするかもしれない。

もちろん、読んでいただいた貴方様のご想像にすべてお任せいたします。

なお、高馬のキャラの原型に関して心当たりがあるかた、土下座して謝りますので、ぜひ申告なさってください（笑）。

おそまつさまでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4556s/>

兄妹以上、きょうだい未満

2011年6月7日10時59分発行